京都新聞
2014年(平成26年)11月26日 水曜日 1

京都新聞大賞 晴れの受賞者

8氏、5団体に

平成26年度京都新聞大賞（文化学術、教育社会、スポーツ、福祉の各賞）は次の13件（8氏、5団体）に決定しました。この賞はそれぞれの分野で優れた業績をあげた人たちにその栄誉をたたえ、京都新聞が贈るものです。贈呈式は11月27日（木）京都新聞文化ホールで行います。（16、17面に受賞者の横顔）

文化学術賞

▽がん抑制遺伝子の研究を進めがん治療新薬の開発に貢献
京都府立医科大学大学院医学研究科教授　酒井　敏行氏

▽仏像彫刻の第一人者として全国の寺院への納仏と伝統芸術の継承に尽力
大佛師　松本　明慶氏

▽抽象的陶造形の構築から独自の表現を確立、教育者として後進の育成に貢献
京都市立芸術大学教授　秋山　陽氏

教育社会賞

▽長年の研究による京都文化の発展・発信への寄与と教育者として学生の指導に尽力
京都産業大学名誉教授　所　功氏

▽学生ボランティアとして犯罪や非行のない明るい地域社会作りに貢献
立命館大学衣笠地区BBS会

▽琵琶湖岸へのヨシ植栽の活動実践を通して子どもたちの環境意識向上に尽力
長浜市立びわ中学校PTA

スポーツ賞

▽皇后杯第32回全国都道府県対抗女子駅伝競走大会　優勝
皇后杯第32回全国都道府県対抗女子駅伝競走大会京都府チーム

▽全日本大学女子駅伝対校選手権大会　優勝
立命館大学女子駅伝チーム

▽スノーボードワールドカップハーフパイプ　優勝
岡田　良菜氏

▽滋賀県の障害者スポーツの普及・発展に貢献
滋賀県障害者スポーツ協会副会長　四塚　康則氏

福祉賞

▽長岡京市で病院ボランティアガイドとして外来患者をサポート
名和まさる氏

▽滋賀国際医療研究会の設立など外国人医療問題解消に尽力
公立甲賀病院顧問　井田　健氏

▽長年にわたり障害者スポーツのつどいを開催
「障害者スポーツのつどい」スタッフ一同

※福祉賞は公益財団法人京都新聞社会福祉事業団との共催

京の三大祭りに光

京都産業大名誉教授　所功さん

平安時代の文人官吏から研究を始め、宮廷の儀式や皇室の系譜へとテーマを広げてきた。京都の三大祭りにも光を当て、それぞれの由来や流れを著書で分かりやすく紹介した。京都産業大では、学生の教育にも力を注いだ。

一貫していたのは京都への強い関心だった。「子どものころに憧れた京都を研究の対象とし、活動の場所にもできたことは幸せ」と喜びをかみしめる。

皇室の一部を京都に迎える「双京構想」に有識者として意見を述べるなど、京産大を退職した後も将来の京都の在り方について積極的に発言を続けている。「京都は文化観光の首都であるべきだ」と熱く語る。

（神奈川県小田原市、72歳）

産経新聞　平成26年(2014年)11月26日　水曜日

モラロジー研究所教授
所　功　72
(神奈川県小田原市)

アピール

皇室の永続に多様な英知活用が必要

ほとんどの日本国民にとって、皇室の永続こそ共通の希望であり念願であろう。しかし、この皇室を担われる方々が次第に減少しつつある。

その要因は、戦後改定の皇室典範と占領政策にある。新典範では、皇位の継承者として側室庶子を否定しながら「男系の男子」に限り、皇族間の養子を認めず、皇族女子の降嫁離籍を定めている。しかも、直宮(じきみや)以外の傍系11宮家皇族が全員皇籍離脱を余儀なくされた。

これらの諸問題を改善するために、今私どもがすべきことは、皇室の永続に役立つ可能性の高い具体案を持ち寄り、それぞれの長所を生かし短所を補う知恵を出し尽くす努力である。

その場合、根本的に重要な皇位継承者は、幸い3代先まで「男系の男子」が現存されるから、この原則は変更しない前提に立つ(男子限定か男子優先かは将来検討)。その上で皇族の減少を止めるには、皇族間の養子を認め、皇族女子を当主とする宮家を立てればよい、と私は考える。ただ他にも複数の案がある。

その一つは、すでに結婚された元皇族女子にしても何らかの尊称を与え皇室活動を手伝ってもらうというもの。最近それに似た案が政府で「閣議決定」の方針だと本紙に報道されている。

一般に結婚後は嫁ぎ先に全力を尽くすのが当然であろうが、里方から頼まれたら手伝うこともあろう。ただ、元皇族にしても公的な役割を認めるには、皇族と三権の代表からなる皇族会議に諮る必要がある。

もう一つは、数少ない皇族の男子を増やすために、「旧宮家の男子を皇族に迎えよ」との主張が本紙正論にも掲載された。ただ、この男子は一般国民として生まれた元皇族の子孫を指すならば、その家筋を選ぶ必要がある。

この点、現在の皇室との血縁が近いのは、明治天皇の皇女が降嫁された4宮家と香淳皇后の出身宮家だから、その子孫は優先されてよいであろう。